

2. 起業教育と国際交流

大阪商業大学 副学長・総合交流センター長 孫 飛舟

グローバル化の進展と起業教育

経済のグローバル化が進む中、起業教育の中にグローバルの要素を取り入れることは不可欠となっている。本学の学生は普段アルバイトの中でインバンド観光客を相手に商品やサービスを販売する機会もかなり増えている。海外顧客のニーズや消費習慣を理解し、日本の企業経営の良さや特色に対する認識がさらに深まることができると言える。国際経営の分野において、「ボーン・グローバル」という創業当初からグローバル展開を目指すスタートアップを指す言葉がある。創業の地はどこであれ、商品やサービスの製造、販売に関しては最初からグローバルでの展開を念頭に置いている。一種の「最適生産、最適販売」ともいうべき発想であろう。

グローバルで活躍することを前提にする起業家にとっては、海外との何らかの接点、海外に赴いた経験、外国の方々とのコミュニケーション、文化、宗教、習慣などについての理解を持つ必要がある。それを個人で体験することは実際、なかなか難しい。したがって、大学での教育、特に起業教育においては、そのような志を持つ学生に教育プログラムの一環として海外との交流機会を提供してあげることがとても重要になってくる。

本学の起業教育における国際交流への試み

新型コロナウイルスの収束にともなって、今年度から本学と海外大学との交流が再び活発になっている。これまで、メキシコ、韓国、中国の大学の方々が本学に訪れて、起業教育をはじめ、教職員、学生同士の交流を図っている。また、本学からも海外の大学に教職員と学生たちが現地に行って交流を行っている。

昨年6月にメキシコのセティス大学の教員と学生、約20名が本学に訪れた。セティス大学は本学と交流協定を結んでおり、本学GETコース学生の留先候補にもなっている。アメリカのカリフォルニア州に近いこともあって、アメリカ籍の学生も多数在籍している。本学では、半日の授業（使用言語は英語、企業経営関連）を受けて、本学の学生との交流を2日ほど行った。交流に参加した本学の学生は、GETコース以外にOBPコースや一般学生も任意で参加している。たこ焼きパーティをはじめ、両校の学生同士がグループ

に分けて大阪の町探索も行った。

11月に中国北京にある中央財経大学の教職員と学生、計10数名も本学を訪れた。本学と中央財経大学との交流がこれまで20年以上続いており、本学の起業家育成教育のOBPコースに感銘を受け、中央財経大学はCBPコースを設けている。以来、両校は毎年「日中（中日）起業教育国際シンポジウム」を開催し、各年輪番で交替開催してきた。新型コロナの期間中は余儀なく中断されたが、昨年再開され、今年は本学で開催する番となった。2日間のタイトな時間の中、両校の学生それぞれ5組が起業に関するアイデアや実践報告を行った。

韓国の大学2校も昨年6月と今年1月に本学を訪問し、学生同士による共同プロジェクトが進められた。大阪にある商店街、ガイドブックに載っていない大阪のおすすめポイントなどを回り、日韓の学生同士が共同で自分たちの発見や感想を発表するというプロジェクトであった。1月の交流ではちょうどえびす祭の期間中で、大阪の商売の神様を祭るイベントに韓国の学生たちが非常に喜んでくれた。

国際交流を通じた感じたこと

国際交流を通じてやはり学生たちが一番感じたことは、言葉の大事さである。海外大学との交流において、英語、中国語、韓国語ができる学生はほんのわずかである。ほとんどの場合、学生同士は片言の英語や翻訳アプリを使ってコミュニケーションを取っていたのだが、意外とちゃんとコミュニケーションが取れたのである。交流後、もっと外国語を勉強しよう、今度自分の口から相手に伝えようと思う学生がほとんどであった。外国の学生たちが取り組んでいること、思っていること、普段どのように過ごしているのか、将来の夢は何かなど、むしろこれらの部分は本学の学生に与えるインパクトが大きい。将来、彼らが社会に出て、社会人として自ら企業経営の最前線に立つ時、大学時代の国際交流の経験は大きな財産になるに違いない。これからも、本学の起業教育において、国際交流を一つ大きな柱として取り組み続けていく。